

医療・介護の「くせもの」用語を使いこなすための見取り図的事典

保健医療福祉 くせものキーワード事典



保健医療福祉キーワード研究会 著
A5 判・256 ページ
定価 2100 円(本体 2000 円+税 5%)
ISBN 978-4-260-00616-3
医学書院, 2008

評者

大島寿美子
北星学園大学文学部

「寝たきり老人」「インフォームド
コンセント」「認知症」「カンファレン
ス」「主治医」「ターミナルケア」「ADL」
「生活習慣病」……。

本書では、医療や介護などの専門
職にとって馴染みの用語ばかり 28
の言葉を取り上げている。その大半
は、医療や介護の専門用語というよ
りも、生活の中で医療や福祉につい
て語るときに多くの人が使っている
言葉でもある。

そのような簡単な日常語が「キー
ワード」となるのはなぜか？

一見、注意や警戒を必要と しない言葉が「くせもの」

本書によれば、掲載された用語は
いずれも、医療や介護において職種
を超えてコミュニケーションするこ
とに重要な役割を果たしているとい
う。たとえば、患者や利用者の状態

を把握する、今後の治療や看護、援
助や介護の方針を考える、患者や家
族からの要望に応えるといった場合
に、医師や看護師、理学・作業療法
士、介護福祉士、ケアマネジャーな
ど異なる職種の人々による話し合い
が必要になることがある。こうした
場面で「判断」や「評価」をするとき
に「要」となるのが、本書で取り上
げている 28 の言葉であり、「往診と訪
問診療」「キーパーソン」「見守り、一
部介助、全介助」といった、一見す
ると注意や警戒を必要としないよう
な平凡な言葉なのだという。

ではなぜこうした言葉が「くせも
の」なのか？

本書によれば、やっかいなことに、
これらのキーワードは、職種によっ
て定義や使われ方が微妙に異なっ
ている。そのため、職種間の話し合
いでこれらの言葉がコミュニケーショ

ンを促進して問題を解決するどころ
か、コミュニケーションを阻害する
ことがあるという意味で「くせもの」
なのだといのである。このような
言葉の曖昧さから生じるコミュニ
ケーションの問題を解決する方法と
してこの「事典」は編纂された。

概念のずれを 「認める」ところから出発

ところが本書は、通常の辞書や事
典が行なうような定義の明確化や厳
密化というアプローチをとらない。
むしろ、執筆者が述べているように
多義的な定義と使用法を尊重する。
つまり、ひとつの言葉に対し、使用
者が所属する現場や職域の文化によ
る概念のずれを「認める」ことから出
発するのが本書の特徴であるといえ
るだろう。いわば、異文化理解のた
めに、互いの職域が価値観を尊重し
ようという手口である。

そのため、1つの言葉の解説のた
めに設けられた項目の構成もユニーク
である。まず、その言葉が登場する
日常的な場面を事例としてあげ、
由来や基本概念を説明する。次に、
「ことばの風景」という小見出しで、
その概念が登場する事例を物語とし
て紹介する。その後、その言葉をめ
ぐる社会情勢が解説され、問題点が
指摘される。さらに、職種間で言葉
の意味や使い方が分かれると思われ
る点があれば、それぞれの職種の意
見を引用という形で併記する。とき
には、ある一専門職の一人語りとい
う体裁で、その言葉を使う場面にお
ける疑問やとまどいが紹介されるこ



ともある。

言葉が使われる文脈を通じてその言葉の概念をすくい取ろうとする野心的な試みであるが、一見すると事例の羅列とも取れる展開にとまどう読者もいるかもしれない。しかし、紹介された事例と執筆者の解説から立ち上ってくるのは、法律や行政による政策によっても解決の道筋が見えない医療や福祉の諸問題と、現場の混乱や戸惑いである。その意味で、本書は各用語を通じて医療や福祉の

過去と現在を見渡す「事典」となっているといえるだろう。

自分の「常識」を相対化し、他職種を理解する

本書を読むことにより、執筆者たちの狙いどおり専門職種間のコミュニケーションがすみやかに改善されるかどうかは未知数である。しかし、それぞれの専門家集団が、自分が使っている言葉に対する「正しさ」への素朴な信仰から離れて、他職種の

理解へと踏み出すきっかけにはなるのではないか。異文化理解と同様、自分の「常識」を相対化し、互いの価値観を尊重するところからコミュニケーションの回路は開かれる。ややもすると、職種のヒエラルキーで序列化しやすい医療や福祉現場のコミュニケーションを架橋し、ケアの現場をさらに豊穡化していく試みとして、本書の提案に注目したい。📖